

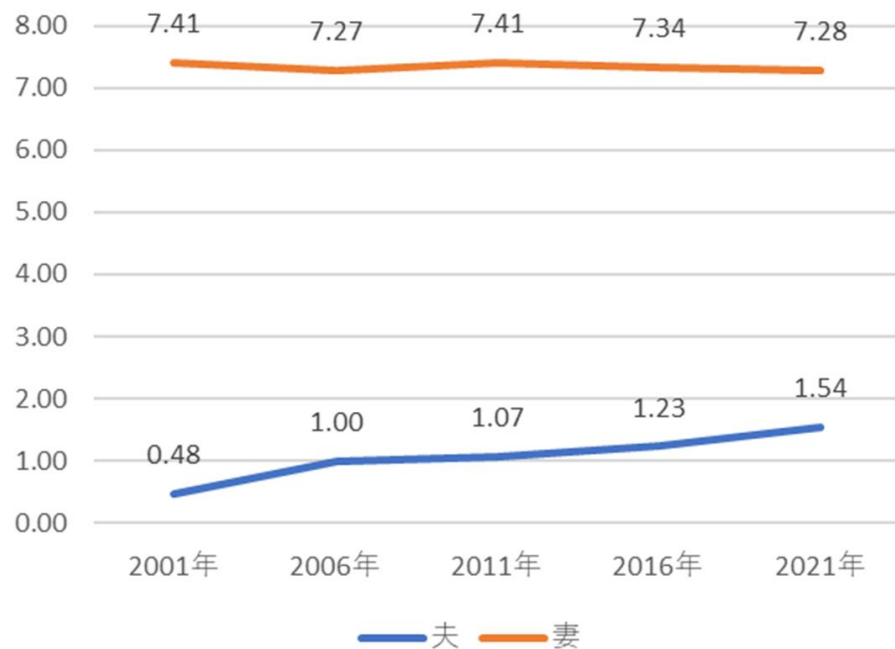
共働き世帯における家族戦略の規定要因

—富山大学職員の共働き世帯を事例に—

富山大学人文学部人文学科 渡邊 彩夢

はじめに

(時間)



女性就業が増加する一方
家事労働の分担は進まず
↓
既婚女性に課される
仕事と家事・育児の二重労働
社会問題として顕在化

6歳未満の子供を持つ夫・妻の家事関連時間の推移
(総務省 社会生活基本調査より作成)

先行研究

ここでは
女性が家事労働をするべき
家庭を守るべきという考え方のこと

Isabel Dyck(1990)

母親が、家事・育児による制約にどう対処しているか検討

- ・ 女性は単なる家父長的制約の被害者ではなく母親業(家事・育児)の実践度合いを自身で調整している
→Dyckはこれを家族戦略の1つとした
- ・ どの戦略が選ばれるかは、家庭の経済状況によると指摘
→各家庭の経済状況は調査されておらず、実証が不十分

先行研究

松田ほか(2001)

夫婦の家事時間の規定要因を解明した

- ・ 夫婦ともに労働時間が長いほど家事時間は短くなる
- ・ 配偶者の労働時間が長いほど本人の家事時間は増加すると指摘

夫が長時間労働の場合に妻の家事時間が大きく増加する現象
→労働時間+家事時間が同等であるべきという観念
妻の家庭への愛情といった要因を予測

研究目的

○研究目的

- ・家事分担の状況から**家族戦略**(妻の母親業の実践度合い)を把握し、いくつかのパターンに分類
- ・家族戦略の差異を生む要因を解明する

○仮説

家庭の経済状況が良いほど、妻は母親業に専念する

→Dyck(1990)「家族戦略の選択は経済状況による」の検討

この仮説で説明がつかない場合は、松田ほか(2001)の指摘などを踏まえ、差異を生む要因を考察する

調査方法

○共働き世帯に対するアンケート調査

富山大学職員の共働き世帯の男女を対象

実施期間：2023年11月30日～2023年12月18日

(女性:41名、男性27名から回答を得た)

○聞き取り調査

アンケート回答者の中から協力者を求め、午前0時から午後12時まで、計24時間の生活活動に関する記録を収集した。

調査対象概要

○富山大学職員の概要

- ・ 常勤職員、契約職員、パートタイム職員の3種類
常勤職員、契約職員はともに8:30～17:15の勤務
パートタイム職員のみ勤務時間が短い
- ・ かつては国家公務員採用試験によって職員を採用
法人化後も独自の採用試験を実施
→ある程度の学歴や知識を持つ人が集まる
ホワイトカラー系の職種

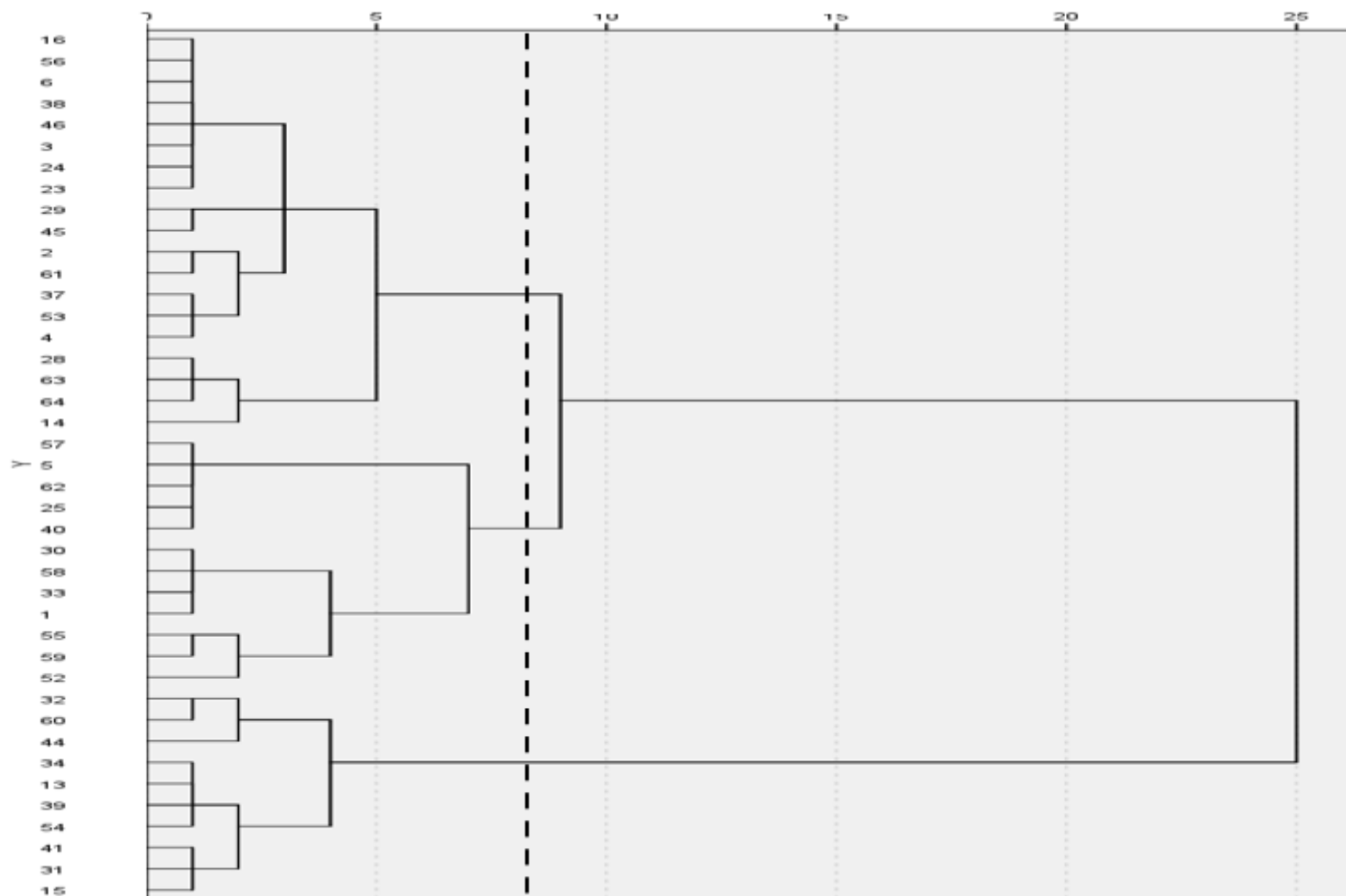
アンケート結果の分析

○以下の質問項目について男女別にクラスター分析を実施

- ・ 夫/妻の料理(調理、片付け、食材の購入など)への貢献度
- ・ 夫/妻の洗濯(洗濯物を干す、取り込む、しまうなど)への貢献度
- ・ 夫/妻の掃除(部屋、お風呂、トイレの清掃など)への貢献度

○女性の回答を3つのクラスターに分類

- a. 洗濯、掃除の貢献度が比較的平等
- b. 料理、掃除の貢献度が比較的平等
- c. どの項目においても妻側が負担している



女性回答者のクラスター分析
(アンケート調査より作成)

聞取り調査の結果①

○クラスターaの家庭

28	夫	妻
料理	2	4
洗濯	3	4
掃除	3	4

アンケート調査より作成

家事の担当者	世帯番号
	28
主に妻	家事全般 ゴミ捨て
主に夫	洗濯機や食洗器の スイッチを入れる
夫婦で分担	

聞取り調査より作成

アンケート調査と聞取り調査の結果に乖離がある

「夫の方が職場も遠くて、仕事時間も長いから、
このような家事分担になってしまうのはしょうがない事。」

聞取り調査の結果②

○クラスターbの家庭

31	夫	妻
料理	4	4
洗濯	4	4
掃除	4	4

アンケート調査より作成

家事の担当者	世帯番号
	31
主に妻	家事全般
主に夫	朝の皿洗い 洗濯物干し
夫婦で分担	子どもの送迎

聞取り調査より作成

「欲を言えば、子どもが帰ってくるときにお帰りなさいと言ってあげられるのが一番いい。でもそれが中々できない。」「家族と一緒に過ごす時間を大事にしたいので、基本的には時間内に仕事を終わらせる努力をしている。」

考察 差異を生む要因①

○仮説の検証

以下の質問項目について、クラスターごとに集計を行う

- ・ 共働きを続ける理由(生活費の不足)
- ・ 共働きを続ける理由(貯金・貯蓄のため)

生活費の不足	a		b		c	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
あてはまる	9	47.4	4	33.3	3	30.0
ややあてはまる	8	42.1	7	58.3	1	10.0
あまりあてはまらない	0	0.0	1	8.3	5	50.0
あてはまらない	2	10.5	0	0.0	1	10.0
合計	19	100.0	12	100.0	10	100.0

貯金・貯蓄のため	a		b		c	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
あてはまる	15	78.9	11	91.7	6	60.0
ややあてはまる	4	21.1	1	8.3	2	20.0
あまりあてはまらない	0	0.0	0	0.0	2	20.0
あてはまらない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計	19	100.0	12	100.0	10	100.0

アンケート調査より作成

考察 差異を生む要因②

○クラスターaとクラスターbの差

クラスターbはクラスターaと比較して
妻の月当たりの残業時間が長い

→夕飯の時間に妻が帰宅できないため

クラスターbの世帯は夫が料理に貢献している

考察 アンケート調査と聞き取り調査の乖離

松田ほか(2001)が指摘した

- ①労働時間+家事時間が同等であるべきという観念
- ②妻の家庭への愛情といった要因を予測

事例世帯28は①に、事例世帯31は②に該当したと考えられる。

文献

- 神谷浩夫・岡本耕平・荒井良雄・川口太郎 1990. 長野県下諏訪町における既婚女性の就業に関する時間地理学的分析. 地理学評論 66A(11) : 766-783.
- 川瀬正樹 1997. 世帯のライフステージから見た千葉県柏市における既婚女性の通勤行動の変化. 地理学評論 70A(11) : 699-723.
- 松田茂樹・鈴木征男 2001. 夫婦の労働時間と家事時間の関係—社会生活基本調査の個票データを用いた夫婦の家事時間の規定要因分析. 家族社会学研究 13:73-84.
- Dyck, I. 1990. *Space, time, and renegotiating motherhood: an exploration of the domestic workplace*. Environment and Planning D: Society and Space 8:459-483